

# 多可町東山古墳群から古代地域社会の復原へ

菱田 哲郎

## 1. はじめに

京都府立大学文学部史学科に歴史考古学講座が設けられたのは1992年のことであり、4月に櫛木謙周教授が着任したのにつづいて、菱田哲郎が10月に講師として赴任した。そこからカリキュラムを整え、同年の入学生が3回生になった1994年4月に考古学研究室が発足した。発足間もない研究室に調査の依頼がはじめてあったのが、兵庫県多可郡中町教育委員会（当時）に勤める宮原文隆氏からの多可寺跡第三次調査出土瓦の整理であった。宮原氏とは同学年であることもあり、ともに学生の頃から東播地域の調査で交流することが多かったが、それが機縁となり最初の調査をお引き受けすることとした。府大の学生では、考古学を勉強するために留年して考古学研究室に加わった永谷隆夫君を中心にその整理を進め、報告をまとめている（宮原・菱田1995）。

このことが契機となり、1996年には同町の東山古墳群の発掘調査をお引き受けすることとなった。16基からなる古墳群の南群12基を対象とする保存目的の調査であり、将来的には県指定史跡、公園整備をめざしていた。大学の夏休みの期間を利用して、1996年から1999年に至るまで4回の調査を実施し、多くの学生が参加することになった。京都府立大学文学部史学科考古学研究室の学生に加え、同学科の他専攻、京都大学、滋賀大学、奈良女子大学、松蔭女子大学、京都造形芸術大学などの学生も参加した。なお、予定通りに終了せず、授業開始後に学生が宿舎から大学に通うといったこともしばしばあった。遺物の整理業務も大学においておこない、報告書も各古墳を担当した学生が中心になってまとめ、『東山古墳群Ⅰ』『東山古墳群Ⅱ』として町で予算を取ってもらって刊行した（菱田・宮原ほか1995、菱田・宮原ほか2001）<sup>(1)</sup>。その成果は大型横穴式石室で構成される古墳群の全容解明にとどまらず、地域社会の変遷を考える基礎資料となった。そうした評価に至る過程をここで概観しておきたい。

## 2. 東山古墳群と造墓原理と階層構造

東山古墳群の調査で明らかになったことからのうち、古墳の造営順序が正確に把握できたことから、盟主墳と衛星墳の関係の明示という特徴がまず挙げられる（図1・表1）。すなわち、6世紀末に築造された1号墳の周囲に、2、3、9号墳がほぼ石室の方位を合わせて造られ、つぎに10号墳と16号墳が主従の関係で造られ、最後に7世紀半ばには15号墳と11号墳、13号墳、14号墳がやはり石室の方位を合わせて造られる。1号墳、10号墳、15号墳の盟主墳は、いずれも全長10m、玄室長5mを超え、床面には敷石をもつ。一方、従属墳とした古墳はいずれも床面に敷石をもたず、



図1 多可町東山古墳群の南群（宮原・菱田ほか 2001）

表 1 多可町東山古墳群の南群

古墳	墳丘	規模	石室開口方向	石室全長	床面	時期	備考
1号墳	円墳	径約30m	N-6° 24'-W	12.5m	敷石	7世紀初 ～7世紀末	
2号墳	円墳	径約16m	N-6° 5'-W	9.3m	置土	7世紀第1四半期 ～7世紀第2四半期	
3号墳	円墳	径約15m	N-10° 54'-W	8.6m	置土	7世紀第1四半期 ～7世紀第2四半期	
4号墳	円墳	径約15m					墳丘調査
5号墳	円墳	径約15m					北群
6号墳	円墳	径約15m					北群
7号墳	円墳	径約15m					北群
8号墳	円墳	径約15m					北群
9号墳	円墳	径約20m	N-10°～12°-W	8.7m～	置土	7世紀前葉 7世紀前葉	
10号墳	円墳	径約22m	N-28° 59'-W	12.0m	敷石	7世紀第2四半期 ～7世紀第3四半期	
11号墳	円墳	径約20m	N-31° 20'-W	9.9m	置土	7世紀中葉 ～7世紀後葉	
12号墳	円墳	径約21m	N-0° 36'-E	11.1m	敷石	7世紀第2四半期 ～7世紀第3四半期	
13号墳	円墳	径約15m	N-31° 53'-W	8.2m	置土	7世紀中葉 ～7世紀第3四半期	
14号墳	円墳	径約18m	N-36° 27'-W	11.3m	置土	7世紀第3四半期	
15号墳	円墳	径約25m	N-31° 24'-W	12.4m	敷石	7世紀中葉？ ～7世紀後葉	
16号墳	円墳	径約15m					墳丘調査

規模も全長 10 m、玄室長 5 m を超えないという規則性があり、このことから築造時において階層差を明示する機能があったと推測できる。なお、12号墳は石室方位の共通性がなく、また無袖式横穴式石室や墳丘内列石を採用する点でも他の古墳と異なっており、陶棺の採用も含め、異質な要素をもつ古墳である。造墓の規則性に従わない古墳ということになる。

以上の築造原理については、多可郡内の他地域の古墳群との違いを検討した。すなわち、西脇市坂本古墳群や古墳群では、一般的にやや大型の石室をもつ古墳が築造された後に、周囲に小規模な石室をもつ古墳が次々と営まれる状況と大きく異なることを指摘した（菱田 2002）。東山古墳群は、従属墳であっても玄室長 4 m クラスの古墳であり、優勢な家族が集まって墓域を形成していることがわかり、その場合に、階層制を明示する造墓原理が現れるとみることができる。郡領層につながる家族が被葬者に想定できると考えた。

その後、東山古墳群のすぐ西に隣接して 2002 年に東山野際 1・2 号墳が発見された（宮原 2004b）。2号墳は無袖の小型横穴式石室で、1号墳は床面に石を敷く横口式石槨であった（図 2）。15号墳と同時期に推定されるが、東山古墳群とは 80 m ほどの距離にあり、同古墳群を構成するメンバーが独立して新たな墓制を採用して墓を営んだ結果と考えられる。家族墓から個人墓への転換を示す典型的な事例として評価できる。

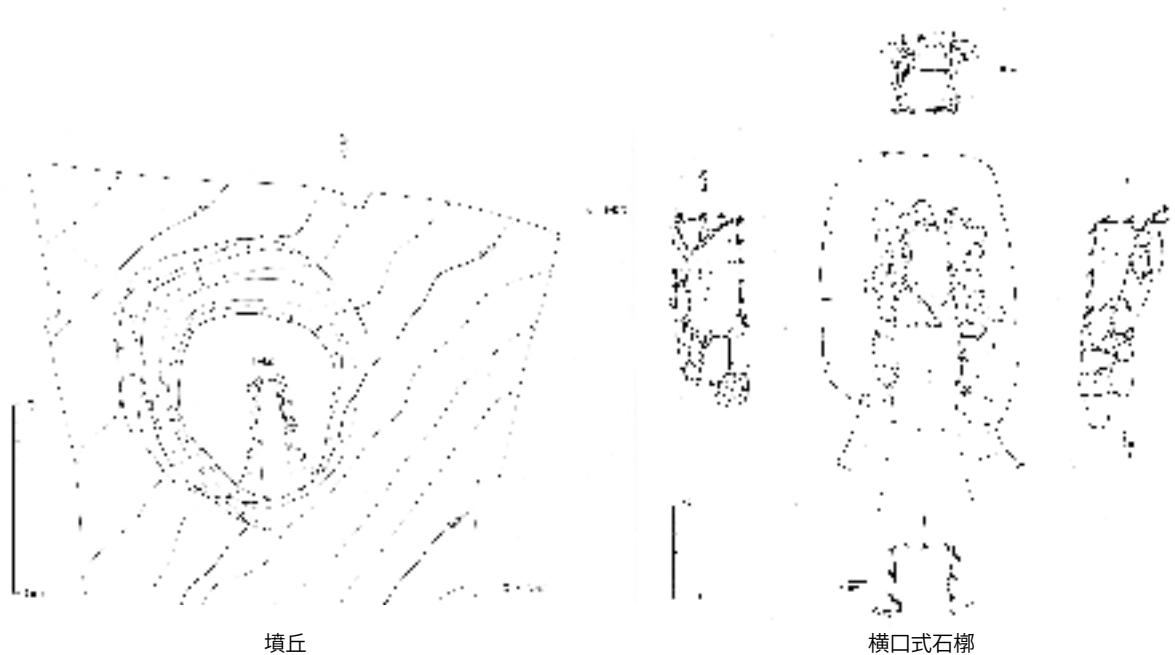


図2 東山野添1号墳の墳丘と横口式石槨（宮原 2004b）

### 3. 多可郡の中心域の成立と開発拠点としてのミヤケ

東山古墳群や東山野際1・2号墳は妙見山麓の古墳群の一つである。妙見山の東裾部の入角北・中・南の古墳群から南麓に古墳群が点在し、南西裾の築ヶ鼻古墳群に至るまで、200基を越す古墳で構成されるが、そのうちの多くが6世紀末から7世紀前半に集中している。こうした現象の背景になるのが妙見山の南に広がる平野部の集落である。

中町教育委員会が実施した分布調査の成果を受けて編まれた『中町の遺跡Ⅱ』には、各時代ごとに概観がされているが、とりわけ古墳時代については、集落と古墳の時期別変遷が示され（図3）、後期古墳の増大と7世紀以後の集落の増加とが相関することが示された（宮原 2004a、小川・宮原 2004）。こうした集落の増大の背景には開発の進展が想定できるが、このことと関係すると思われるが開発拠点としてのミヤケの設置である。播磨国多可郡のミヤケの記載は史料には現れないが、平城京左京二条二坊五坪二条大路北濠から出土した木簡に「播磨国多可郡中郷三宅里・日下部漢目庸米六斗」と記されたものがあり<sup>(2)</sup>、郡郷里制の段階、すなわち奈良時代初めに中郷に三宅里があったことがうかがえ、ミヤケ地名が前代の屯倉によるものと考えた。このことと関係して、先進農具である犁が安坂城の堀遺跡で出土し、7世紀代のものと推測されることも開発の拠点としてのミヤケの存在を示している。また、この地域に関係する人名として、正倉院文書の「智識優婆塞文」に「宗我部小敷年一九 播磨国多可郡奈何郷戸主宗我部老人戸口」とあり、屯倉と関係の深い宗我部の存在が読み取れる。ミヤケを核とする開発の結果、移住者を含む人口の増大が、集落から離れて名山のもとに群集墳を形成したのではないかと推測した。多地域においてもミヤケと群集墳との関係が指摘されており、こうした例の典型例になると考えた（菱田 2013）。

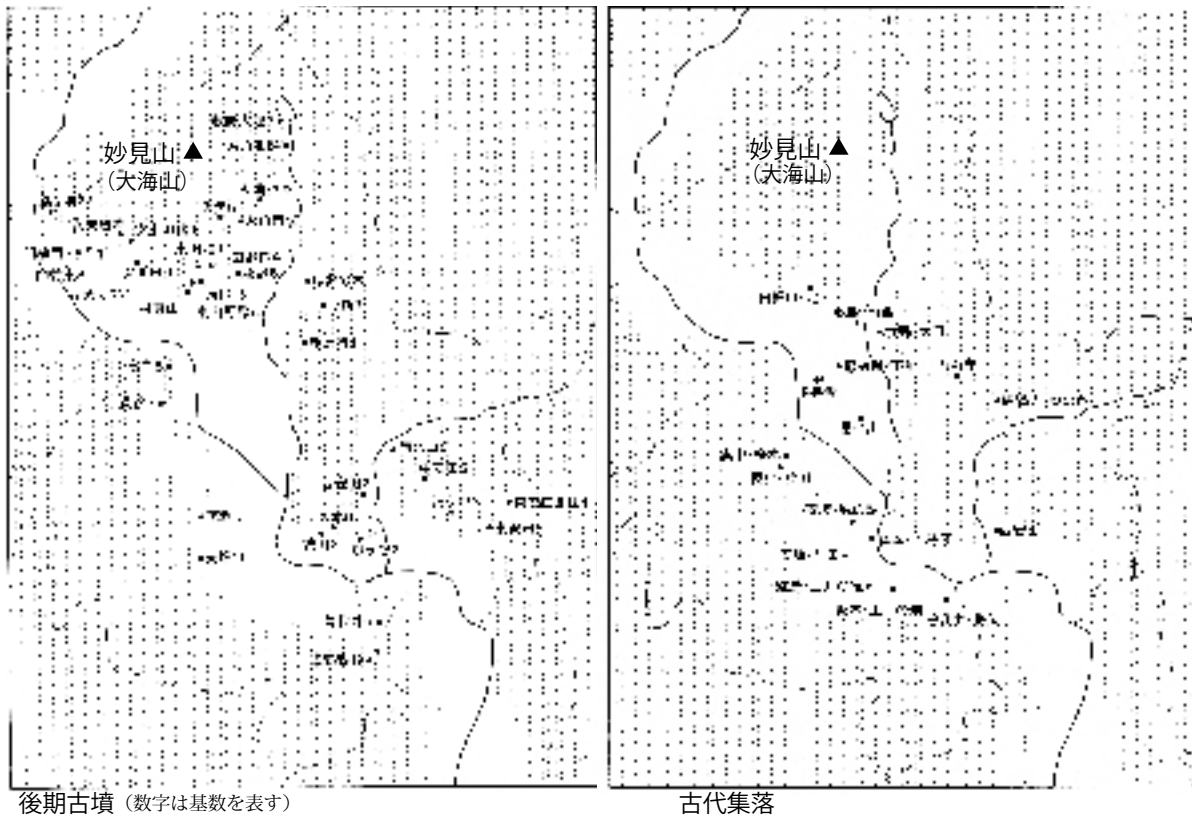


図3 播磨国多可郡中心部の後期古墳と古代集落の分布 (宮原 2004a、小川・宮原 2004)

その後、宗我部については、重要な考古学的な知見が加わることとなった。2007年から2008年にかけておこなわれた曾我井・沢田遺跡において奈良時代の人工流路が発見され、その出土資料の中に、「宗我西」「宗我口」と墨書された土器が出土したのである(西口 2012)<sup>(3)</sup>。残念ながら、調査地で発見された遺構の中心は古代末以降であり、奈良時代の集落の中心は未発見であるが、ほかにも「中家」の墨書土器のほか、呪符木簡や斎申も同じ奈良時代の流路から出土し、「奈何郷」の中心的な施設の存在が想定できる(図4)。このことは、先に触れた正倉院文書の「播磨国多可郡那何郷戸主宗我部老人」と関わるとみられ、考古学的な発見が居住者をも推定できる稀有な例として特筆できるが、宗我部の奉仕したミヤケもこの周辺に考えることができ、上述した安坂城の堀遺跡などがその候補となる。



図4 曾我井・沢田遺跡の墨書土器 (西口 2012)

このように、多可郡中区における集落遺跡の増大の背景に、この地域に置かれたミヤケが大きな役割を果たしたと推測できた。そもそもミヤケについては、その性格につい

ても不明な点が多いが、部民やそれを率いる伴造たちの王権への奉仕拠点と考えると理解しやすい。多可郡の場合、山部、宗我部、日下部などの部民の存在が明らかであり、彼らの奉仕する拠点がミヤケと呼ばれていたと考えることができる。そして、遺跡の消長からは、設置の時期を6世紀末～7世紀初めに求めることができるが、『日本書紀』推古天皇十五年(607)是歳条に、池溝の設置に続けて「亦毎国置屯倉」の記事があり、こうした段階に新設されたミヤケの一つとして把握できよう。

#### 4. 多可のミヤケへの移民と明石郡大海(邑美)里

多可郡における集落遺跡の増加と関連する記事として、『播磨国風土記』の託可郡条の大海山に関する記述がある。「大海と号くる所以は、昔、明石郡大海里の人、此の山底に到来して居す」とあり、明石郡の大海里からの人の移住を明記している。この大海山については、「近江坂」の地名が多可町加美区観音寺にあり、その周辺の山塊に求められていたが<sup>(4)</sup>、その山塊の頂点である妙見山に比定するのが妥当であろう。妙見信仰の普及は平安時代以降であることから、妙見山がもともと大海山と呼ばれていても問題なく、むしろその山底に集落が展開するという点で、大海山が最もふさわしいと言えよう<sup>(5)</sup>。また、上述した東山古墳群をはじめとする古墳群が、この妙見山を意識した立地になっていることも、風土記の時代に名山として認識していたことを表示していると考えられる。こうした点から風土記の記事が伝えているのは、新たに多可町中区に出現した古代集落の背景に、明石郡大海里からの移住者が重要な位置を占めていたということになる。

その明石郡大海里は、『和名類聚抄』の邑美郷であり、明石市魚住町西岡に「大見」の遺称地名もあって<sup>(6)</sup>、その場所の比定に問題がなく、明石市魚住町周辺に求められる(図5)。この地域の古墳時代後期の遺跡でまず注目されるのが、赤根川金ヶ崎窯跡である(山下・稲原・白谷1990)。6世紀前半に稼働した須恵器窯跡で、陶器MT15型式に近似する製品のほか、角杯形須恵器などを生産した遺跡で、東播磨地域の窯業の起点になった生産地である。こののち、周辺では6世紀中葉の鴨谷池窯跡、7世紀に入ると高丘窯跡群あるいは清水新田窯跡群が展開しており、窯業生産の継承がみとめられる(北山1985、山田1986、稲原2013)。この魚住町には後期古墳も点在しており、とりわけ寺山古墳は石見形盾形埴輪や銀象眼の刀装具をもつ刀が出土したことで知られ、6世紀中葉の有力者の存在がうかがわれる(稲原2021)。このほか、文五郎塚古墳が6世紀後半に造られた横穴式石室墳であり、中尾新田古墳はこれらに先行する木棺を主体とする古墳と想定されている(宮本1985)。また、同時期の集落として中尾住吉遺跡も知られている。こうした遺跡の展開からは、多可郡域よりは一足早く、6世紀代を中心に興隆した地域と考えられ、この地から多可への人の移動は十分に想定できる。

この邑美の地が注目されるのは、聖武天皇の印南野行幸の際に行宮が置かれたことである。即位から2年半ほどたった神亀3年10月に聖武天皇は、印南野から難波に行幸したが、そのための準備として、9月27日に造頓宮司に18名の人物が任じられ、そして、いよいよ10月7日に印南野行幸に出立し、10日には、「印南野邑美頓宮」に至っている。その後、10月17日には「行宮側辺」の明石・賀古両郡の百姓に褒美が下され、19日には難波に至っている。



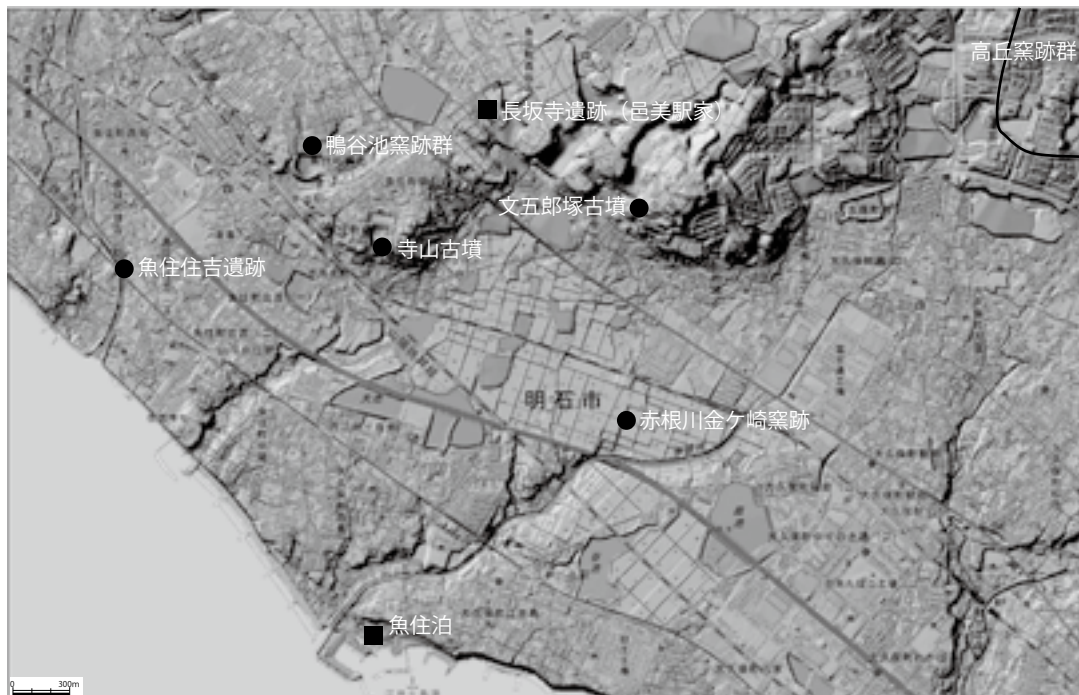


図5 明石郡邑美郷の遺跡（●古墳時代後期 ■奈良時代）

この行幸をめぐるのは、栄原永遠男氏は、かつて印南野において瑞兆である「豊旗雲」を見たときとされる天智天皇の事績を聖武天皇が踏襲することにその目的があったとする指摘をおこなっている（栄原 2015）。単なる行幸とは異なり、王権にとって印南野や邑美の地が特別な意味をもっていることとなる。『播磨国風土記』に記される王権と播磨の関係が、端的に表れていると言えるが、そうした播磨においても邑美が王権の出先拠点という位置づけが可能となる。

この邑美頓宮の跡は明らかにはなっていないが、注意されるのが長坂寺遺跡で、逸名の駅家であることが明らかになり、郷名から「邑美駅家」と称されている（高橋美 1982）<sup>(7)</sup>。頓宮の準備期間が短いことから、この駅家の施設が頓宮に転用された可能性が高いのではないかと考えている。長坂寺遺跡の調査の結果、他の駅家と同様に 80 m 四方の区画をもつ駅館院の敷地が発見され、播磨国府系の瓦を用いた築地が明らかになっているが、その下層からも山陽道に沿う掘立柱建物が発見され、初期の駅家と推測されている（中川 2013）。時期的な関係からは、この段階の建物が頓宮として利用された可能性がある<sup>(8)</sup>。

この邑美郷を特色づけるものに魚住泊がある。これは三善清行の「意見封事十二条」の最後に、「重ねて播磨国魚住泊を修復するを請うの事」に行基が程を計って設置した、榎、韓泊、魚住泊、大輪田泊、河尻泊として知られている。大輪田泊にかかる寺院である船息院が天平 2 年に設けられたことから、これら 5 港の整備も航路を維持する観点から同時期におこなわれたと考えることができる（菱田 2020b）。そうすると、聖武天皇の行幸からほどなくして魚住泊の整備がおこなわれたこととなる。聖武天皇の行幸自体も天智天皇を踏襲するとすれば水運を利用したと考えられ、同道した人々の歌にも「名寸隅乃船瀬」として魚住泊が登場する<sup>(9)</sup>。この点も踏まえると邑美郷は瀬戸内海水運にとっ

でも要地と言え、王権との深い関係もそういった立地によるのであろう。こうした王権との関わりの深い場所がミヤケであった可能性も高く、大海（邑美）から多可への人の移動はミヤケを介した移住であったと考えることができる。

この地域とミヤケとの関係で注意されるのは、高丘窯跡群における瓦生産である。高丘窯跡群は7世紀初めに須恵器の窯として開窯し、その後、7世紀第2四半期から瓦を生産している。その瓦は飛鳥の奥山廃寺と同文であり、厳密には証明されているわけではないが、そこへの供給の可能性も考えられる。7世紀前半代では、瓦の遠隔地供給が広くおこなわれており、その一つの例に加えられ、その背景にミヤケの存在が推測されている（上原 2003、新尺 2023）。上原真人氏は高丘窯跡群と播磨国の縮見屯倉との関係を推測したが、むしろ魚住を中心とする邑美にあった逸名のミヤケを考えるべきであろう。宇治の隼上り窯、楠葉の楠葉平野山窯跡のように、遠隔地供給の窯は、ミヤケというよりも王宮との関係で理解できる場所にあり、こうしたことから邑美の地と王権との深い関係が示唆されていると言えよう。

以上で述べてきたように、多可郡中区を中心とした平野部の開発が、ミヤケを軸にした人の移動を伴うものであったことを推測してきた。ミヤケを核とした開発が玉突き的に広がっていく現象が7世紀前半を中心に敷衍化することができるのではないかと考えている。

## 5. 多哥寺の造営と多可評の成立 ～ミヤケからコホリへの試論～

3章で触れたように、多可町中区には7世紀前半にミヤケを核とした開発が進み、それが妙見山（大海山）南麓の古墳群の形成に反映していると考えた。その頂点に君臨したのが東山古墳群の盟主墳の被葬者たちである。史料上は、「正倉院文書」の「優婆塞文」に登場する山直が直姓であり、最も可能性が高い。史料に現れる多可郡居住氏族についての記載がごく少ないこともあり、即断は控えねばならないが、7世紀後半以降の評督・郡領についても山直が候補となる。この両者をつなぐ重要な役割を果たしているのが多哥寺跡である。多哥寺跡には現在、量興寺が位置しており、寺蔵の中世文書から、当寺がもと「多哥寺」と称したことが明らかであり、盛衰を繰り返しながらも現代まで法灯を継承した寺院であると言える（図6・7）。発掘調査の結果、四天王寺式の伽藍が明らかになっており、出土瓦から7世紀中葉の創建年代が推測されている（奈良大学文学部考古学研究室 1997）。平安時代前期の梵鐘鑄造遺構も発見されており、補修を受けつつ継続した寺院であることは疑いなく、史料には現れないが多可郡随一の寺院として定額寺に列せられたと考えられ、「量興寺」の寺号もそうした機会に賜ったものと推測される。この寺院の位置からは東山古墳群がよく見え、とりわけ同時期の15号墳の横穴式石室羨門が正面に捉えられる。こうした関係からも東山古墳群の造墓集団と多哥寺の檀越とが一致することが推測でき、同時に郡名を帯びる寺院であることから、評督、郡領となった氏族を背景にするとみてよいだろう。上述したように、その候補は現状では山直のほかにはない。

さて、郡名寺院は郡家との関係が深いことが知られている<sup>(10)</sup>。多可郡の場合も、この多哥寺の周辺に多可郡家を求めるべきであろう。多哥寺跡に隣接する思い出遺跡がその候補であり、これまでの



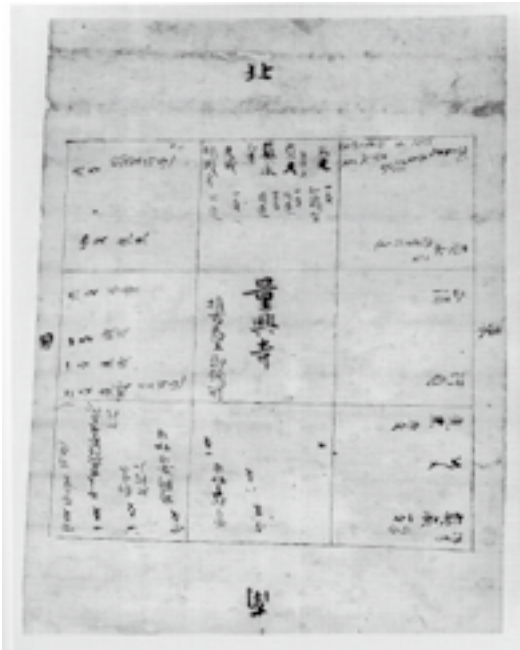


図6 量興寺文書 寺領図



図7 量興寺の周辺地割



図8 思い出遺跡第10区の井戸と掘立柱建物 (宮原・小川 2000)

調査成果では、第10区で発見された割り抜き式の井戸と回廊状の掘立柱建物(図8)が目玉になる(宮原・小川2000)。出土した遺物からは7世紀第3四半期に成立したと考えられ、多哥寺とほぼ軌を一にする。また、多哥寺とほぼ東西に並ぶ位置であることも、岐阜県の弥勒寺と弥勒寺東遺跡(弥勒寺官衙遺跡群)を彷彿とさせる。こうした点から、これらの遺構が多可評の中核に関係すると考えた。一般的な郡衙遺跡の成立よりも古くなるが、回廊状の建物の類例として松山市久米官衙遺跡をあげることができ、初期地方官衙の可能性をもつ遺跡として注視しておきたい。

多可郡全体に目を向けると、古墳時代前期から中期にかけては、西脇市域を中心に、加古川流域に中心があったと考えられるが、6、7世紀の交から多可町中区を中心に開発が進み、結果としてこの地域が郡の中心域になったとみてよいだろう。そうすると、ミヤケを核にした開発が決定的に重要な

役割を果たしたと言え、ミヤケからコホリへの接続という問題が浮かび上がってくる。

文献史料には、ミヤケからコホリへの展開を具体的に記すものではなく、微かな記述をもとにその接続について想定されているにすぎない（鎌田 2001）。史料に現れた屯倉の名称についても、積極的にコホリに継承されたと考えられる例はごく少数にとどまっている。しかしながら、多可郡の中核域の展開でみられたように、7世紀における一貫した地域の発展は、7世紀前半のミヤケの時代から7世紀後半のコホリの時代への継続性を強く印象づける。とりわけ、東山古墳群でみとめられたように、7世紀を通して盟主墳の造墓が継続し、階層構造が維持されるとともに、それぞれの追葬も7世紀末までおこなわれている点からは、地域社会に大きな変動がなかったことを示唆している。部民を率いて王権に奉仕する伴造たちが、そのまま評督・郡領層へと転換したと言えそうである。むしろ、地域を主軸に眺めてみると、ミヤケの設置にこそ意義があり、そこからはスムーズに律令社会に移行しているように受け止められよう。こうした多可郡の事例は、必ずしも普遍的ではないかもしれない。大型横穴式石室を築いた有力者と郡領層との接続がむしろ各地域の課題となろう。

各地において集落遺跡の消長の検討が進む中で、6世紀末から7世紀初頭の画期が重視されるようになって久しい。また、須恵器生産においても第2の拡散期として注目され、この時期から継続的な生産がおこなわれる地域も多く知られている。それに先行する6世紀後半の生産地を含め、ミヤケ設置の広がりや須恵器生産の拡散との親和性は高いと考える。こうしたさまざまな分野を統合的にみていくことから、改めて7世紀前半の社会を評価し、コホリの前史として把握することが求められている。多可郡の例は、こうした取組みを推し進めるパイロット事例になればと祈念している。

## 6. おわりに

1992年に京都府立大学へ赴任して最初に取り組んだプロジェクトでもあり、兵庫県多可町における地域社会の変遷の検討は、今日に至るまで大きな研究の柱になっている。まだまだ未解明の部分が多く、新たな課題が次々に生じているが、こうした状況こそ、考古学研究の醍醐味とも言える。本研究にあたって地元側のカウンターパートとしてご助力いただいた宮原隆文氏、小川真理子氏、安平勝利氏に改めて謝意を表するとともに、東山古墳群の調査をはじめ、研究室の調査に参加し、真摯に取り組んでくれた京都府立大学の元学生たちにも感謝の意を伝えたい。また、さまざまな場面でサポートいただいた兵庫県教育委員会・兵庫県立考古博物館のみなさまにも改めてお礼を申し上げる次第である。

### 註

- (1) なお、一部の遺物の追加報告と金属器の修理報告を（菱田・富永・宮原 2004）に収めている。
- (2) 東山古墳群の調査時に現地にお越しいただいた榎木謙周氏から本件についてご教示を得た。
- (3) なお、発見された人工流路は東西にほぼ直線的に掘られており、長さが70 m以上に及ぶことから、何

らかの施設を区画する溝である可能性もある。

- (4) 『多可郡誌』に「今の観音寺の辺にて今鬼坂とも近江坂ともいふ」と記載がある（兵庫県多可郡教育会 1923）。
- (5) この点については、すでに述べたことがある（菱田 2020a）。
- (6) 遺称地名の探索は中川渉氏がおこなっている（中川 2010）。
- (7) 同書において、すでに頓宮・行宮と駅家の互換性について述べられている。なお、長坂寺遺跡を駅家と推定したのは（今里 1960）を嚆矢とするが、今里氏もまたのちに邑美駅家として積極的に議論している（今里 1994）。
- (8) なお、高橋明裕氏は、邑美頓宮について「近世大見村から長坂寺遺跡の付近に所在した」可能性を挙げ、その見晴らしのよい立地を重視している（高橋明 2020）。
- (9) 万葉集巻 6－935、題詞に「三年丙寅秋九月十五日、幸於播磨国印南野時、笠朝臣金村作歌一首、并短歌」とあり、日付が『続日本紀』の記載とは齟齬する。
- (10) 常陸の仲寺（台渡里廃寺）と那賀郡衙（台渡里遺跡）、新治寺（新治廃寺）と新治郡衙（古郡遺跡）、茨木寺（茨城廃寺）と茨城郡衙（外城遺跡）、上総の武射寺（真行寺廃寺）と武射郡衙（嶋戸東遺跡）、河内の安宿寺（円明廃寺）と安宿郡衙（円明遺跡）など。

#### 引用文献

- 稲原昭嘉 2013 「高丘古窯跡群」『明石の古代』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市
- 稲原昭嘉 2021 「古墳時代の道」『明石の古道と駅・宿』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市
- 今里幾次 1960 『播磨国分寺式瓦の研究—加古川市野口町古大内出土の古瓦—』播磨郷土文化協会研究報告第四冊
- 今里幾次 1994 「古瓦から邑美駅家を復原する」『歴史と神戸』185
- 上原真人 2003 「初期瓦生産と屯倉制」『京都大学文学部研究紀要』42
- 小川真理子・宮原文隆 2004 「奈良・平安時代概観」『中町の遺跡Ⅱ』中町教育委員会
- 鎌田元一 2001 『律令公民制の研究』塙書房
- 北山惇 1985 「鴨谷池古窯址群」『明石市史資料』四集（考古篇）明石市教育委員会
- 栄原永遠男 2015 「聖武天皇の印南野行幸と難波宮の造営」『大阪歴史博物館研究紀要』13号
- 新尺雅弘 2023 「初期瓦生産における王権の技術労働力編成」『史林』106-2
- 高橋明裕 2020 「古代の魚住泊について」『明石の歴史』3号
- 高橋美久二 1982 「古代の山陽道」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社
- 中川渉 2010 「邑美駅家について」『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県教育委員会
- 中川渉 2013 「邑美駅家について」『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 奈良大学文学部考古学研究室 1997 『多可寺遺跡Ⅱ』中町教育委員会
- 西口圭介 2012 「曾我井・沢田遺跡の調査」『曾我井・堂ノ元遺跡 曾我井・野入遺跡 曾我井・沢田遺跡—社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財調査上告書—』兵庫県教育委員会
- 菱田哲郎 2002 「横穴式石室の造墓原理—東山古墳群と坂本古墳群を中心に—」『横穴式石室からみた播磨』第2回播磨考古学研究集会実行委員会
- 菱田哲郎 2013 「7世紀における地域社会の変容—古墳研究と集落研究の接続をめざして—」『国立歴史民俗博物館研究報告』179集

- 菱田哲郎 2020a 「多可郡（託賀郡）の古代」『北はりま定住自立圏連携事業巡回共同企画展 西脇・多可の古代』  
西脇市教育委員会・多可町教育委員会
- 菱田哲郎 2020b 「行基菩薩の考古学」『グレートブッダ・シンポジウム論集』18 東大寺
- 菱田哲郎・富永里菜・宮原文隆 2004 「東山古墳群補編」『東山野際1・2号墳—那珂ふれあい館建設に係る文化財発掘調査—』中町教育委員会
- 兵庫県多可郡教育会 1923 『多可郡誌』同会
- 宮原文隆 2004a 「古墳時代概観」『中町の遺跡Ⅱ』中町教育委員会
- 宮原文隆 2004b 「東山・野際遺跡の概要」「東山野際1・2号墳と東山古墳群」『東山野際1・2号墳—那珂ふれあい館建設に係る文化財発掘調査—』中町教育委員会
- 宮原文隆・小川真理子 2000 『思い出遺跡群Ⅱ』中町教育委員会
- 宮原文隆・菱田哲郎 1995 『多哥寺遺跡』中町教育委員会
- 宮原文隆・菱田哲郎ほか 1999 『東山古墳群Ⅰ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
- 宮原文隆・菱田哲郎ほか 2001 『東山古墳群Ⅱ』中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室
- 宮本 博 1985 「中尾新田古墳」『明石市史資料』四集（考古篇）明石市教育委員会
- 山下俊郎・稲原昭嘉・白谷朋世 1990 『赤根川・金ヶ崎窯—昭和63年度発掘調査概報—』明石市教育委員会
- 山田邦和 1986 「播磨の須恵器生産」『鴨谷池遺跡』明石市教育委員会・同志社大学考古学研究室